



秋から冬へと、寒い季節の健康管理。気をつけたい病気は？心がけたいケアは？  
愛犬の元氣と健康を保つためのアドバイスです！

# 10コのドクターズ・アドバイス

## 1. 秋の換毛期は、冬毛を蓄える時期です。

犬には、オーバーコート(上毛)とアンダーコート(下毛)の両方を持つダブルコートと、上毛のみのシングルコート犬種があります。ダブルコート犬種では一年に2回、春と秋に換毛期があります。秋の換毛期は、夏毛が抜けて、寒さから体を守るために、綿毛のような下毛がびっしりと密生した冬毛に生え替わります。抜け毛は春ほど大量ではありませんが、こまめなブラッシングで、抜け毛を取り除くとともに、皮膚を刺激して、被毛や皮膚の新陳代謝を高めてあげましょう。



ブラッシング関連商品は→P.72



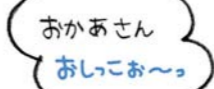
## 2. 気温低下が引き金で、発症したり、悪化しやすい病気も。

急激な冷え込みなど寒暖の差が激しいと、心臓に大きな負担がかかり、慢性の心不全を持つ犬などは咳が激しくなったり、時には肺水腫を起しやすくなることも。また寒い時期は、飲水量が減って、膀胱炎や尿石症など、

それとともに、冬毛を蓄えるために気をつけたいのが栄養管理です。健康な皮膚と被毛をつくるためには、必須アミノ酸を豊富に含むタンパク質を十分に摂ること、そして必須脂肪酸であるオメガ3脂肪酸<sup>※1</sup>とオメガ6脂肪酸<sup>※2</sup>のバランスの良い摂取が不可欠です。愛犬のフードも、しっかりと吟味して選んであげたいですね。

<sup>※1</sup>魚油に含まれるDHAやEPA。アミン油、エゴマ油などに含まれます。  
<sup>※2</sup>コーン油、大豆油、ゴマ油など、ほとんどの植物油に含まれます。

泌尿器系の病気が増える季節です。愛犬が、いつでも新鮮な水を飲むようにしておきましょう。とくに外で排泄する習慣の犬は、飼い主さんが寒さで散歩を控えたりますと、排尿を我慢して、膀胱炎の原因になることもあります。室内でトイレができるようになっていると安心です。さらに、寒さで血液循環が悪くなり、関節の痛みが出ることもあります。関節がまだ温まっていない状態で、いきなり激しい運動をさせることは避けましょう。また、日常生活でも、滑りやすいフローリングの床にはカーペットを敷いたり、足の裏の毛が伸びていると滑りやすくなるので、定期的に刈りあげると、愛犬の関節に負担がかからないように配慮してあげましょう。



## 3. 抵抗力が低下する時期なので、ウイルス感染症に注意!

冬は気温の低下や空気の乾燥により、ウイルスが飛散しやすくなり、体内に取り込まれやすくなる時期です。また人間も動物も、鼻やのどの粘膜の動きが弱まり、細菌やウイルスに対する抵抗力が低下する時期でもあります。

この季節になると、私たち人間の間でもインフルエンザが流行しますが、犬も体調を崩しやすい、ウイルスによる感染症に気を付ける必要があります。病気の抵抗力が十分でない、初めて冬を迎える子犬は、とくに注意してください。ウイルス感染症のなかには、命にかかわる危険な病気もあります。ワクチン接種を忘れず。



## 4. エアコン完備の住環境では、ノミは通年の予防と対策を。

ノミは春や夏の暖かい時期だけ気をつけたいかと思いがちですが、ノミは気温が13℃以上あれば活動・繁殖が可能です。エアコン完備で室温が一定温度以上に保たれている最近の住環境では、通年の予防と対策が望めます。

成虫が見られない時期でも、

## 5. 「犬は寒さに強い」という思い込みは危険かも。

屋外飼育の場合は、犬小屋の入り口を仕切りで覆って、風の吹き込みを防いだり、敷物を入れるなどの防寒対策を。夜間だけ玄関に入れるのも良い方法です。室内飼育の場合も、エアコンや暖房器具の温度調節に注意してください。暖かい空気は上に上がるので、犬たちのいる床付近は意外と寒い可能性があります。また、暖房を切った夜間との温度差が大きいと、ストレスの原因にもなりますし、散歩などで屋外に出たときの極端な温度差もよくありません。高齢の犬や慢性の疾患を持つ場合は、とくに注意が必要です。一般に「犬は寒さに強い」といわれますが、冷暖



ウェアは→P.56~59

## 6. 犬フィラリア症の予防は、蚊がいなくなっても。

犬フィラリア症は、蚊が媒介しますが、秋になり蚊が見られなくなっても、最低1~2ヶ月の間は、継続して予防が必要です(地域差がありますが、11月~12月頃までが目安)。月1回飲む予防薬<sup>※</sup>は1ヶ月間効果が持続するのではなく、犬の皮下や筋肉に入り込んだ幼虫を駆除するための薬だからです。

<sup>※</sup>スポットタイプ(滴下式)や注射タイプの予防薬を利用の場合は、かかりつけの獣医師と相談してください。





こんなときは  
要注意!

# 病気の早期発見 チェックリスト



愛犬たちは、「おなかが痛い」「なんだか熱っぽい」など、私たちに様々な形で体調の変化を発信しています。そのサインにいち早く気づいてあげられるのは、飼い主のあなたしかいません。毎日の暮らしのなかで、いつもと違う様子が見られたり、気になることがあれば、どんな些細なことも安易に考えず、できるだけ早く動物病院で相談してみましょう。

## 1 食欲はどうですか？

- 食べない。急に食欲がなくなった。(いつもと同じだけあげているのに、残してしまう)
- 偏食が多くなった。(以前はふつうに食べていたものを食べなくなった)

## 2 体型はどうですか？

- 太ってきた。
- やせてきた。(よく食べるのに、やせてきた)
- おなかが膨れてきた。
- 身体の一部が腫れている。

## 3 散歩のときは？

- 歩くのがつらそう。
- 散歩に行きたがらない。
- 元気がない。
- 歩き方がいつもと違う。

## 4 目はどうですか？

- 目ヤニが出る。
- 目をつぶる。(まぶしそうにする)
- 目(結膜)の色が赤い。
- 目の表面(角膜)が白く見える。
- 目の内側(水晶体)が白く見える。
- 目をかゆがり、こする。

## 5 口や歯の様子は？

- よだれが出る。口を閉じない。
- 食べたそうなのに食べられない。
- 出血している。
- 口臭がひどい。
- 歯が抜ける。(乳歯以外)
- 歯が重なって2重にはえている。
- 歯茎や舌の色が悪い。(白くなっている)

## 6 毛や皮膚は？

- 毛の状態がおかしい。(毛が一部分だけ抜けていたり、不揃いになっている)
- かゆがっている。
- 虫(ノミやダニなど)がついている。
- 皮膚が赤くなっている。
- 皮膚がただれている。
- フケが多い。

## 7 耳はどうですか？

- 耳をかく。(かゆがる)
- 耳の中が臭い。
- 頭をしきりに振る。
- 耳の中が汚れている。

## 8 便の様子は？

- 血が混じっている。
- ゆるい。(便が軟らかい)
- 下痢をしている。
- 便が出ない。(便秘をしている)

## 9 尿の様子は？

- おしっこのおかしい。(赤い、白っぽい、黄色い、など)
- 出ない。少ない。(出そうとしているのに出ない)
- いつもはちゃんと決められたトイレですのに、違う場所で排泄したり、もらしてしまう。
- においがきつい。

## 10 その他、こんなことにも 気をつけましょう

- 水をよく飲むようになった。
- 吐く。
- 体的一部分をしきりになめる。
- 咳をよくする。
- お尻をこすりつける。
- 鳴き声がおかしい。
- よだれが出る。(よだれが止まらない。悪臭があったり血が混じっている。あぶく状になっている)



間仕切り・ゲートは→P.44

何でもおもちゃにする子犬はとくに要注意！電気のコードやコンセントをかじって、感電事故を招くこともあるので、コードにカバーを付けるなどの対策を。

食品用ラップ、ストッキング、ボタン、針や糸、たばこ、薬、殺虫剤など、暮らしのなかには口にする危険なものが数多くあります。多い事故としては、人間の風邪薬や鎮痛薬を食べたり、熱冷まし用保冷剤をかじって中の凍液を食べたり、ガーデニング人気のなかで、ナメクジ駆除剤を口にするケースも。薬の管理と駆除剤などの散布には細心の注意を払ってください。

植物のなかには、犬が口にするとう中毒を起こすものがあります。例えば、ポインセチア、ジャスミン、アサガオ(種子)、アボカド、ヒヤシンス、シクラメンなど。これからの季節、とくにポインセチアやシクラメンなどは身近な鉢花なので、気をつけて。植物以外にも、ビニール、

## 9. やけどや火事など、 暖房器具に注意して!

暖房器具によるやけどや火事などにも、注意してください。ストーブに近づきすぎて被毛をかいたり、ベッ トヒーターに長時間接触して低温やけどを負うことも。また電気のコードを引っかけてストープを倒したり、ストープの近くで布製のおもちゃで遊んだりすれば、火事の原因にもなりかねません。一緒に



お散歩用品は→P.54

## 8. 散歩のおサボりは いけません!

寒くても、年齢や健康状態に応じた適切な運動は欠かせません。寒さが苦手な犬は、衣服で防寒対策をして散歩に出かけましょう。また、だんだん日が短くなるので、暗い夜間の散歩は気をつけて。車からは小さな犬は見つけにくく、交通事故の危険も高くなります。どんなときも、必ずリードを着用してください。

## 10. 冬太りには、 理由があります。

冬は、寒さから身を守るために、体が脂肪を蓄積しやすくなります。しかも、体温を維持するためのエネルギー消費も、暖房の効いた室内飼育では期待できません。そのうえ、寒いから散歩もつい短縮がち。油断すると太る要因がいくつもあわけてです。

食欲が増進する秋冬ですが、与えすぎは厳禁です。とくに高カロリーな人間の食べ物やお菓子類は与えないこと。栄養面でもしつけの面でもよくありません。食事や年齢や健康状態に応じてカロリーや量を考え、バランスよく与えるようにしましょう。



この服  
縮んだみたい。

そばにいられないときや、いたすら盛りの子犬がいる場合には、ケージやサークルに入れておきましょう。



秋から冬の  
健康管理

10月のドクターズ・アドバイス